

男がこちらに銃口を向けていた。その肩越しに浮かぶ月が眩しい。

男の声がした。

「話にならん」

靴底で、真上から踏みつけられる。

「それで怪盗キッドを名乗るつもりか」

キッドは唇を歪めた。

笑っているつもりだったが、顔の筋肉を動かすことすらままならない。無理に動かせば、頭痛と共に、耳鳴りが酷くなった。

漸く絞り出した声は、情けないほど掠れ、震えていた。

「……んだよ……銃、持つてるんじゃない……ね
エか……」

リヴォルバー拳銃の引き金に男の指が掛かる。

しかし、それが引かれることはなかった。

「十年前、怪盗キッドを殺した銃だ。今のお前は、

これを使う価値も無い」

キッドは、拳を握り締めた。力を込めると、軋むような痛みが腕に砕けそうだった。

あの日　父が死んだ日に見た火柱と、辺り一面を覆い尽くした砂塵が甦る。

空虚なほど青い空と、その場に崩れ落ちた母。

悔しい。

父を殺した男が目の前にいて、父の命を奪った凶器が目の前にあるというのに、その前で、自分は何一つ出来ないのだ。

脇腹にとどめの蹴りが入る。もう声も出ない。

「殺して欲しいか?……こいつで。父親と同じように」

耳鳴りは最早、耐え切れないほどに大きくなっていった。何故消えないのだろう。

急速に霞がかる意識の向こうで、男の声が聞こえ

そこに、誰かの叫び声が被った。